

【調査報告】

小学校児童クラブにおける 「わらべうた研究会」の活動報告

藤 重 育 子

1. はじめに

本稿は、課外活動「わらべうた研究会・シグマソサエティクラブ」における部員による学外活動の報告に加え、活動先から得られたアンケート調査結果をまとめ、職員の捉え方を把握した調査報告である。

課外活動「わらべうた研究会・シグマソサエティクラブ」(以下「わらべうた研究会」と示す)は、設立から 10 年以上が経過し、発足当時から主には児童教育学科の保育者養成学生で構成されていると聞いている。現在の部員は、4 年次生 5 名と 2 年次生 25 名から成り、主な活動として、普段は週に一度のサークル活動を部員で行い、夏期や冬期の長期休暇には学外から依頼のあった施設へわらべうたの披露や参加型活動のため赴いている。後者の多くは、夏期休暇中の小学校児童クラブで行うことが多い。

2. わらべうたを扱う先行研究より

室町 (2013) によると、わらべうたとはコダーイ・メソッドとして受け継がれているものと説明している。またその中で、強調している点として、音楽教育は音楽能力だけではなく子どもの多面的な能力を育てるものであり「音楽は全ての人のもので、本当の音楽教育は音楽を理解し楽しむもの」でなければならないとしたコダーイの教育観に基づいて生まれた総合的な音楽教育法であると唱えている。わらべうたを保育において活用することについて渡辺 (2014) は、わらべうたを子ども達が好むこと、子ども達が覚えやすく歌いやすいこと、友達同士で繰り返して遊びを楽しめること等を挙げており、コミュニケーションの手段になる長所があるということもわかった。また、井上 (2015) はわらべうたの教材性に着目しており、幼小の異年齢交流活動において、友達が遊んでいる様子を見て自ら加わり遊ぶというような変化が見られたことから、媒介物の理解に自信をもってかかわることが「人とかかわろうとする意欲」を育むのに有効であると示している。これらのように、わらべうたが保育や教育、また交流の場面において有益であることが見て取れる。

3. 児童クラブにおける活動

(1) 大学生によるわらべうた遊びの活動

毎年夏期休暇、冬期休暇には地域の児童に関連する施設、地区の親子ウェルカムパーティへ出向き活動を行っている。内容としては、わらべうた遊びを通じた参加型の活動となり、先方からの依頼を受け、日程調整の後、現場へ赴いている。活動時間はおおよそ2時間程度である。今回は、2017年夏期休暇中に依頼を受けた中から、3年次生5名（現4年次生）が中心となり訪問した市内の3校に隣接する児童クラブにおける活動についてまとめた。

8月7日はA児童クラブ、8月8日はB児童クラブ、8月10日はC児童クラブでの活動を行い、3日ともに「やなぎのしたには」、「なべなべそこぬけ」、「こんこんさん」、「さよならあんころもち」の4曲を実践した。児童数は、30～50名程度であった。10時過ぎから12時前までの約2時間を、併設された小学校の体育館を借りて行った。毎週の活動において上記の4曲はもちろん、前後のルール説明や解説などの練習も行った。加えて当日は、実践前の最終打ち合わせを近隣の公園で行いそれぞれの動きを確認した（写真1）。



写真1 実践前の最終打ち合わせ

「やなぎのしたには」は、リズム歌の最後にじゃんけんを用いる遊び歌で、初回は全員が起立して実践する。前に立つ学生とのじゃんけんにおいて負けた児童は着座するルールで、2回目以降は徐々に勝負する児童数が減り、最後まで参加し勝ち残った児童が優勝という仕組みである。



写真2 「やなぎのしたには」の実践

じゃんけんの度に児童の歓喜や落胆の音が体育館に響いた。写真2は、その実践の様子である。

「なべなべそこぬけ」は、二人組で顔を合わせた状態で両手を繋ぎ、「そこがぬけたらかえりましょ」のリズム歌とともに、手を繋いだまま互いに背を向けるように動く遊び歌で、二人組から四人組へと人数が増えても楽しめる遊びである。今回の実践では、円になった上で二人組が実践し、それぞれ二度目の「かえりましょ」のリズムで180度回転して二人組の相手を交代する流れとなった。そして、円の大きさにもよるが、何度目かの「かえりましょ」のリズムで、最初の二人組に戻るといった仕組みである(写真3)。最初の二人組がわかれ、それぞれ右回りと左回りから何度か別の二人組を実践した後、再会した二人組での喜びや円での一体感を味わう児童の姿が見られた。



写真3 「なべなべそこぬけ」の実践(円での遊びの様子)

「こんこんさん」は、鬼ごっこ遊びに類似しているリズム遊びである。鬼役を行う学生と一定距離の離れた場所に児童がおり、それぞれの間で会話し決まり言葉の後に、児童は逃げ、鬼役の学生が追いかける遊びである。児童から「こんこんさん遊びましょ」と声をかけられると、鬼役の学生は「寝ています」、「顔を洗っています」、「ご飯を食べています」等の返答をし、食事のおかずをたずねられた際に、学生の「へびの生きたん(生きた蛇)」という返答が合図となり、児童は逃げるという仕組みである。返答によって、いつ追いかけられるか分からないスリルを感じ全力で逃げる児童の姿が印象に残っている。また、実践前の説明においてもルール説明をしっかりと聞き、遊びへの意欲が見受けられた(写真4)。



写真4 「こんこんさん」説明の場面

「さよならあんころもち」は、終了前の遊び歌である。「さよならあんころもち、またきなこ」と共に発声しながらリズムをとり、一体感を味わいながら実践終了となった。

それぞれのわらべうた遊びについて、ルールやリズム等の説明を要したが、参加した小学生以上の児童は熱心に聞き入り、暑い時期ではあったものの思い切り体を動かし実践できていた。

(2) 活動先職員によるアンケート調査結果

学生のわらべうた遊び実践後に、活動先の職員に対して質問紙調査を行った。20名からの回答が得られた。

①属性

年齢は40代と50代が最も多く各6名、次いで20代が3名、30代と60代が各2名、無回答が1名であった。現在の職務について経験年数をたずねたところ、1～5年が7名、6～10年が6名、16年以上が4名、11～15年が2名、無回答が1名であった。

②日頃のわらべうた遊び

日頃から、わらべうた遊びを行っているかどうかについては、「遊んでいる」という回答が半数以上の11名からあり、児童クラブの中でも日常的にわらべうた遊びが実践されている様子が見えてきた。具体的なタイトルをたずねたところ表1のような結果が得られた。円やグループにわかれての遊びや、やり取りのある遊び等、口ずさむことのできるわらべうた遊びが児童クラブにおいても実践されており、大人から子どもへ伝承されていることが見て取れた。「その他」には「あぶくたつた」や「ゆうびんやさん」、「とおりゃんせ」等の各1名から回答が挙げられていた。

表1 児童クラブにおいて日頃実践されているわらべうた遊び

日頃実践しているわらべうた遊び	人数(名)
あんたがたどこさ	5
花いちもんめ	4
なべなべそこぬけ	3
かごめかごめ	2
おてらのおしょうさん	2
その他	9

③実践において印象に残ったわらべうた遊び

当日行った実践の中で、職員の印象に残っているわらべうた遊びの有無についてたずねると、17名から「ある」という回答があり、具体的な内容を表2に示す。

最も多かった「なべなべそこぬけ」については、二人組で実践する以外の遊び方、普段と異なるアレンジが新鮮さや楽しさに繋がったように思われた。「こんこんさん」や「やなぎのしたには」については、歌詞が長かったりセリフがその都度異なったりしたが、繰り返すリズムや単調な動き等から混乱することなく、児童が楽しく参加できていたことが回答から見て取れた。尾見(2001)は、わらべうたの教育的意義の一つとして、自分たちの歌で自分たちの遊びを囃すことを主張している。遊びを心地よく進めているのは、拍に乗った唱え言葉やふしであり遊びであ

る。みんなでリズムカルに言葉を唱えたり、ふしを歌う時に、みんなの声が揃う心地よさを感じる。向かい合う相手の声を聞きながら自分も歌い全体の声を同時に聞き、多層的に他者を意識する環境に身を置き続ける。みんなの揃った声が全体の身体の動きを伴奏している。短い歌を繰り返し歌うという反復が遊びのルールによって短い周期で歌のたびに相手が次々代わるという変化を生み出す。遊びを楽しくさせるのは歌と身体の動きとルール、他者の存在である。二人組の相手が隣へと規則的に代わり一巡して最初の相手に戻った時、子どもたちは大喜びし特別の他者を認識する。以上のような点を職員が感じ取り、印象に残る結果となったのであろう。

表2 印象に残っているわらべうたとその内容

上段：タイトル 下段：人数	印象に残っている内容（記述回答のまま掲載）
「なべなべ そこぬけ」 9名	・円になってどんどん移動していく所が面白かった。
	・二人でずっとするのはではなく、円になり人が変わっていく所がよかったです。
	・普段自分の好きなこと以外はあまりしたがらない男の子たちが楽しそうに参加していた。特別支援児さんも参加できて良かった。
	・みんな男女問わず仲良くできてすごく楽しそうでした。
	・私知っている「なべなべ」は2人組で遊ぶのと二重円になってする「なべなべ」だったので移動の仕方が3歩で交代するのが少し頭を使う？（私だけ）楽しかったです。
	・私自身子どもの頃にした覚えがあったので懐かしかったです。
	・自分が知っていたのと違ったので新鮮でした。
	・1対1でする遊びだと思っていたのですが、多人数で関わり合えた（ペアが変わっていく）のが驚きでとても楽しかったです。
	・私が子どもだった頃、よく友達と遊んだなあと思った。
「こんこんさん」 5名	・お互いに交代での言葉の掛け合いが楽しさを倍にしてくれていた。
	・鬼ごっこなので子ども達が楽しめると思った。また子ども達と一緒にしてみたいです。
	・鬼の指示をよく聞いて遊ぶところ。
	・子ども達が走り回って楽しそうにしていたところ。
	・みんな元気に走り回っていて楽しそうだった。
「やなぎの したには」 3名	・言葉や手の動きは違って子どもでもわかりやすくリズムを取りやすいし楽しく遊べる。
	・子ども達にリズム遊びで受け入れやすいなと思いました。

④実践後のわらべうた遊びについての振り返り

実践後に、職員から児童へわらべうた遊びに関する内容を話したかどうかについてたずね、「ある」と回答した9名から具体的な内容を得ることができた。菊池（2008）によると、過去には、身体的同調を有し、見てまねるという行為が成立しやすく、わらべうた遊びの伝承も自然のものとして行われていたが、近年このような子ども集団は減少しており、わらべうた遊びが伝承される機会も減っていると報告されている。実践時だけでなく、表3のように実践後の振り返りとして職員からの伝えられる話や問いかけにより、児童にとってわらべうた遊びが自然に定着され、そうした繰り返しによって、伝承されている遊びとなっていることがわかる。

表3 職員から児童へわらべうた遊びに関して話した内容とその反応について（記述回答のまま掲載）

先生から子どもへ話した内容	子どもの反応、様子
・昔のおじいちゃん、おばあちゃん達が子どもの頃はゲームで遊ぶのではなく、わらべうた遊びで友達と遊んでいたなど。	・友達と手をつないだり、歌を歌ったりとしながら遊ぶことがないので子ども達はわらべうた遊びは楽しいけれど少し恥ずかしいと話していた。
・「わらべうた楽しかったね」と話し、昔はいろんな遊びをしていたことを伝えた。	・保育園でしたことがあると言っていました。
・わらべうたが楽しかったかどうか	・またしたい、遊びたい！と言っていた。
・「また今度みんなでしょうね」と話した	・「いつするの？」という感じでした。
・楽しかったねということを話しました。	・声を弾ませて楽しかったことをたくさん話していました。
・全体について話した。	・終了後子ども達が楽しかったことを話していました。また今日のような遊びがあったら参加したいと。
・知っているわらべうたがあったなどと話し合った。	・すごく楽しそうでした。
・「さよならあんころもち」のわらべうたをした。	・早速その日の午後、口ずさんで遊んでいました。
・いくつか実践した中で、知っているものがあったか聞いてみた。	・今までに「わらべうた遊び」に参加したことのある児童は少しは知っている風だったが、初参加の児童は聞いたこともないという感じの印象だった。

⑤わらべうたに対する印象

児童が実践するわらべうた遊びについて、自由記述で求めたところ、表4のような結果が得られた。肯定的な意見だけではなく、年齢や時代背景等の様々な点に考慮しながら実践しなければならないような否定的な意見を聞くこともできた。その時に応じたアレンジを加えながら実践することや、人と関わる遊びの楽しさを伝える一つとして活動することに対する参考となり、貴重な意見であった。

表4 わらべうた遊びの印象

わらべうたに対する印象（記述回答のまま掲載）
・今の子ども達はわらべうたというものに接する機会がないと思うので来ていただいて子ども達に教えて頂けるのはとても良いことだと思います。
・現代は楽しいことがたくさんあるけれど、ゆったりとわらべうたで遊ぶ経験も良いものだなあと感じます。子ども自ら遊んでいる姿を見ると「楽しく遊んだのだな、子どもの中にまた一つ花が増えたんだな」と感じます。実際に子どもが遊び、その中でさらに遊びが深まり広がることもあって、奥深いものだと思います。
・この仕事を始めてから、わらべうた遊びをゲーム形式にしたり、4月当初は新しい友達との出会いもあるので、手遊びや簡単な身体を使うわらべうた遊びを取り入れています。
・児童にとっては身近なものではなく「昔の遊び」という感覚のようです。浸透させるには実践を重ねた方が良いと思います。
・自分自身が経験してきたものと少しだけ違うところがあったりすると、子ども達に教えてもらうこともあり、新しい発見がある。変化しながらでも受け継いでいきたいと思っています。
・小学生になりわらべうた遊びをすることが少ないと思うので、このような機会はとても重要だと思います。普段遊んでいない友達とも触れ合い笑い合えるので嬉しく思います。
・低学年にとっても幼稚園保育園でしたことがあるので、取り組みやすいが、児童ホームは高学年もいるので成長すると少し「しにくい」「のりにくい」遊びのように感じた。
・伝承遊びとして子ども達に伝えていくことは良い経験だと思います。

・伝承遊びを楽しむということは良いことだと思うので続けていけたらと思います。
・昔からの歌は、慌ただしくなく心が和む気がしています。
・昔と違い指導員がリードしないと今の子は自主的に上手にわらべうた遊びができないように思う。
・昔の遊びを知れて良いと思います。
・わらべうた遊び、徐々に見かけるのが少なくなっている今日です。従って意図的にお手玉遊びや大縄跳び、集団遊びで取り入れています。
・わらべうた遊びの中には「花いちもんめ」のように大きさに言えば、いじめの助長になってしまうものもあるので、子ども達がしている時には様子を見たり一緒に入るようにしている。
・わらべうた遊びをすることが少なくなりましたが4月当初に手遊びを取り入れることがあります。低学年は喜んでいましたが、高学年には恥ずかしさもあるようで難しいです。伝承遊びがいろんな形で楽しめたらいいなあと思います。

⑥実践後の歌う様子や遊ぶ様子から今後の活動に向けて

わらべうた遊びについて、実践後に児童主体となって歌っている様子を見たかどうかについては「見た」との回答が8名であり、また児童主体となって遊んでいる様子を見たかどうかについては、「見た」との回答が6名であった。さらに、今回のような実践について今後、職員が「ぜひ体験したい」から「まったく体験したくない」までの4件法で、児童に対して「ぜひ体験させたい」から「まったく体験させたくない」までの4件法で、それぞれたずね、得られた回答を0から3点の得点化し算出した。

「児童主体で歌っている様子を見たかどうか」、「児童主体で遊んでいる様子を見たかどうか」と「職員が体験したい」と回答した平均値をクロス集計したものを表5に、「児童主体で歌っている様子を見たかどうか」、「児童主体で遊んでいる様子を見たかどうか」と「児童に体験させたい」と回答した平均値をクロス集計したものを表6に示した。いずれも、児童主体で遊んでいる様子を見た時に、わらべうた遊びについて実践の気持ちが強まっていることが見て取れた。また先にたずねた、実践後に職員から児童へ話をしたかどうかについて、「職員が体験したい」($t(18) = 0.53, n.s.$)、「児童に体験させたい」($t(18) = 1.06, n.s.$)それぞれの項目とのクロス集計を行った結果、有意差が見られなかったことから、話をしたり歌ったりするだけでなく、実際に児童が遊ぶ姿を目の当たりにすることにより、職員が再度体験したいと思うようになり、児童へも体験させたいという気持ちになるということがわかった。

これらをふまえて、今後のわらべうたを用いた活動においては、遊びの説明や方法を伝えるだけでなく子どもたちが実践できる雰囲気作りも大切にすることや、そうした遊びの時間をでき

表5 「職員が体験したい」と回答した平均値とのクロス表

質問項目		人数(名)	平均値	標準偏差	t 値
歌っている様子を見たかどうか	有	8	2.63	0.518	0.18 n.s.
	無	12	2.58	0.515	
遊んでいる様子を見たかどうか	有	6	3.00	0.000	4.16**
	無	14	2.43	0.514	

** $p < .01$

表6 「児童に体験させたい」と回答した平均値とクロス表

質問項目		人数(名)	平均値	標準偏差	t 値
歌っている様子を見たかどうか	有	8	2.75	0.463	0.74 n.s.
	無	12	2.58	0.515	
遊んでいる様子を見たかどうか	有	6	3.00	0.000	3.6**
	無	14	2.50	0.519	

** $p < .01$

るだけ長く設けてこちらの指示ではなく主体的に遊べるよう促していくこともわらべうたを楽しむ遊び繋いでいくために必要ではないかと思われた。

4. おわりに

本稿は、課外活動「わらべうた研究会」の活動報告を行った。学生の活動に加えて児童クラブにおいて実践後、職員へのアンケート調査を行った。それらの結果から、わらべうた遊びに対する職員の捉え方を把握することができた。

本報告は2017年度の一部であったが、2018年度も同様に活動を行っており、4年次生、部長の石黒美羽さんをはじめ、部員の天本結友さん、池内華湖さん、深水菜々さん、和田ゆかりさんの5名が中心となって、依頼を受けた地域における活動を盛んに行っていた。彼女たちが部員となってからこれまでに、のべ30か所以上は地域での実践活動を行っている。地域の方に必要とされることだけでなく、彼女たち自身もまた学びの場を経験し成長したように感じる。新たに今年度からは20名以上の2年次生が活動に賛同し、参加の申し出があった。活発な活動によって、保育技術としてのわらべうた遊びがさらに磨かれることと思われる。歴史ある「わらべうた研究会」が今後も発展することを祈っている。

参考文献

- 井上薫 (2015) 「わらべうたによる幼小交流を通じた児童の変化－園児とのかかわり方に着目して－」 学校音楽教育研究第19巻, pp.3-13
- 菊池里映 (2008) 「保育場面におけるわらべうた遊びの存在－同調の表現としての出現－」 音楽教育実践ジャーナル第6巻第1号, pp.28-39
- 室町さやか (2013) 「幼児教育におけるわらべうたの意義と指導法－コダーイ・メソッドに鑑みて－」 千葉経済大学短期大学部研究紀要第9号, pp.45-54
- 尾見敦子 (2001) 「幼児教育におけるわらべうたの教育的意義」 川村学園女子大学研究紀要第12巻第2号, pp.69-92
- 渡辺優子 (2014) 「保育におけるわらべうたの教育的効果－担任アンケートとわらべうた遊びの分析を通じた考察－」 新潟青陵学会誌第7巻第1号, pp.1-10

[ふじしげ いくこ 保育幼児教育学]